

## 第2部講演

## ブラジル・カストロ市のオランダ系移民

丸山 浩明

第2部ではカストロ市のオランダ系移民についてお話しします。最初にブラジルにおけるオランダ人移民の歴史について概観した上で、事例調査地域のカストロ市カストロランダ移住地におけるオランダ人移民の歴史、移民の婚姻関係と言語・民族文化の継承、農産業協同組合と酪農業の現状について、順次お話ししたいと思います。

## 1. ブラジルにおけるオランダ人移民の歴史

オランダ人は1624～1654年にかけて、ブラジル北東部に位置するペルナンブコのレシフェ・オリンダを占領し、植民地を建設しました。しかし移民としては、1854年にエスピリト・サント県に創設された帝国植民地のリオ・ノーヴォへの入植が最初で、スイス人、ベルギー人、ドイツ人、フランス人、オーストリア人などと一緒に植民しています。その後は、1908年にパラナ州イラティ (Irati) に設置された連邦移住地のゴンサルヴェス・ジュニオルに、やはりドイツ人やスラブ系移民らと一緒に入植しましたが、いずれも植民は失敗に終わっています。

オランダ人が中心となり創設された最初の移住地は、1911年にカストロ市に作られたカランベイ移住地で、これがオランダ人移住地の嚆矢となりました。しかし、本格的なオランダ人移民の到来は第二次世界大戦以降のことで、1940～1975年の移民総数は7120人に達しました。1948～1960年にかけて創設されたオランダ人移住地は、オランブラ (Holambra, SP)、ナン・メ・トケ (Não Me Toque, RS)、カストロランダ (Castrolanda, PR)、カンボス・デ・オランブラ (Campos de Holambra, 別名オランブラ II, SP)、アラポティ (Arapoti, PR) で、いずれもオランダ人が集住する中核的な移住地といえます。また1960年代後半～1980年代には、これら中核的な移住地の子孫たちが、オランダ直来の移民とともに、新天地を求めてブラジルの南西部や南東部へと進出し、パラカトゥ (Paracatu, MG)、マラカジュ (Maracaju, MS)、ブラソランディア (Brasolândia, MG)、リオヴェルデ (Rio Verde, GO) といった移住地を次々と創設しました。

1886～1975年にブラジルに入国した移民数を国籍別にみると、オランダ人移民は1万5104人であり、イタリア人の約150万人、日本人の約25万人、ドイツ人の約20万人、ロシア人の約11万人などと比べてその数は圧倒的に少ないです。しかし、ブラジルの農業分野におけるオランダ人移民の存在感は絶大で、その中核的な移住地であるオランブラはブラジルの「花の首都 (Capital Nacional das Flores)」、ナン・メ・トケは「精密農業の首都 (Capital Nacional da Agricultura de Precisão)」、カストロランダは「牛乳の首都 (Capital Nacional do Leite)」と呼ばれています。

オランダ人と一言でいっても、宗教の違いによりブラジルでの移住地が明確に二分されていることも大きな特徴です。すなわち、オランダ南部出身のカトリック教徒たちはおもにサンパウロ

州やリオグランデドスル州に、オランダ北部出身のプロテスタント教徒たちはおもにパラナ州に、それぞれ別々に入植して移住地を建設しました。

その際、ブラジルへの移住を支援したのがキリスト教組織で、オランダカトリック農園芸家協会 (Associação dos Lavradores e Horticultores Católicos da Holanda, Katholieke Nederlandse Boeren Tuinders Bond)、キリスト教移民センター (Central Cristã de Emigração, Christelijke Emigratie Centrale)、キリスト教農園芸家協会 (Associação Cristã de Granjeiros e Horticultores, Christelijke Boeren en Tuinders Bond) の3つが、おもに移住前の準備や移住後の生活支援を行いました。サンパウロ州のオランブラやカンボス・デ・オランブラ、リオグランデドスル州のナン・メ・トケはカトリック教徒の移住地で、そこから1960年代後半以降にパラトゥ、ブラソランディア (ウナイ)、リオヴェルデといった移住地が派生的に創設されました。一方、パラナ州にあるカランベイやカストロラング、アラポティはプロテスタント教徒の移住地で、マラカジュは1972年にカストロラングからの再移住者たちにより創設されました。

それでは、なぜ第二次世界大戦後にオランダから大量の移民が生じたのでしょうか？オランダ人移民の増加を、プッシュ要因とプル要因に分けて考えてみましょう。オランダは1940～1945年までドイツ軍に占領され、国土はその戦禍で激しく荒廃しました。広大なポルダー (低湿地の干拓地) が広がるオランダでは、とりわけ堤防の破壊による農地の浸水により多くの農家が職を失いました。また戦後は、農村の急激な人口増加により土地不足や経営規模拡大の限界が露呈し、農民たちは子どもたちの将来に希望が持てませんでした。また、移住者の言説には、戦後に顕在化した米ソ冷戦下における共産主義者の侵入に対する恐怖と不安が、ブラジルへの移住を決めた一因であったという記述もみられます。さらに、戦時中にカナダなどからやって来た連合軍兵士とオランダ人女性との間に子どもが生まれ、戦後オランダ人女性や子どもたちが政府間の取り決めにより移住するという事案も発生しました。

一方、戦争による国土の直接的な被害を免れたアメリカ大陸の国々では、農業労働人口の増大による農業の発展や、ヨーロッパの先進的な農業技術の導入などへの期待がありました。こうした中、オランダの将来を悲観した若い家族農民たちが、おもにカナダやオーストラリア、アメリカなどへ大量に移住しました。1940年代後半から1970年代にかけて、オランダから出国した移民の総数は約50万人に達し、その37%にあたる18.5万人がカナダ (おもにオンタリオ州とアルバータ州) へと移住しました。

カナダ移民の特徴は、戦後オランダ政府が最初に二国間の移民協定を締結して実施した、政策的な移住だったことです。また、実際の具体的な移植民事業は、宗教組織に大きく依存して実施されたことも看過できません。これは、同じ宗教に属する家族移民を優先的に募集して移住させることで、移住後の移民集団の精神的、教育的、社会・経済的支援を円滑に進められるように配慮したものとと言えます。実際、ブラジルでは、異なる宗教に属する移民を同じ移住地に入植させた結果、移住後にさまざまな困難や紛擾が噴出して失敗した移植民事業が数多くみられます。政府が主導し、その実務を宗教組織がバックアップして実現した戦後のカナダ移民の成功例が、その後のブラジル移民のモデルにもなったと考えられます。

## 2. カストロランダのオランダ人移民の歴史

ここからはカストロランダ移住地についてお話しします。カストロランダは、1951～1954年にかけて、カストロ市の中心地から東に約5kmの郊外に創設されたオランダ人移住地です。その土地は、ヤポー川とその支流が作る低湿地や丘陵地に広がっています。カストロランダの中心地は、当初の計画では低湿地に建設される予定でしたが、入植後に丘陵上の現在の位置に変更されました。入口には巨大な穀物サイロが林立するカストロランダ農産業協同組合があります。その西側には同組合の農場、移民の瀟洒な住宅地、2001年開業の巨大な風車 (moinho de vento、内部には製粉場、博物館、イベントホール、図書館、レストラン、民芸品店がある。写真1)、カストロランダ文化センター (Centro Cultural Castrolanda、移民博物館が併設)、私立のカストロランダ福音派学校 (Escola Evangélica da Comunidade de Castrolanda)、カストロランダ福音改革派教会 (IER, Igreja Evangélica Reformada de Castrolanda)、墓地などが分布しています。

オランダ人移民が集住する住宅地には、瀟洒な家屋が並んでいます。手入れの行き届いた広い庭には、巨大な木靴をあしらった花壇もみられます (写真2)。私がインタビューしたある家では、広い室内にたくさんの美しい花があふれていました。また、乳牛やヒツジが放牧されている郊外には、牧歌的な農村風景が広がっています。

それではまず、オランダからカストロランダに移住するまでの移民前史についてお話ししましょう。1945年に法令7967号により移民法を改正したブラジルは、専門的な知識を持つ協力的な農家の集団移住を奨励しました。そして1949年、政府は既存のカランベイ移住地に住むオランダ人移民の助けを借りて、オランダのキリスト教移民センターとキリスト教農園芸家協会に対して、ブラジル移民送出の可能性を打診しました。これを受けてオランダではブラジル移住に関心がある農家が集められ、1950年6月に最初の会合がオーファーアイセル州のズヴォレ市で開催されました。その後、合計2回にわたり水利や農業の専門家がブラジルに派遣され、移住地査定の現地調査が行われました。

ブラジルが提示した移住候補地は、リオグランデスル州のバジェ (Bagé) 郊外とタイン植民計画地 (O projeto de colonização do Taim)、パラナ州のカストロランダ (Castrolanda) の3地域で



写真1 カストロランダのシンボルである翼幅26mの巨大風車 (2017年8月筆者撮影)



写真2 木靴形の花壇があるオランダ人移民の瀟洒な住居 (2019年8月筆者撮影)

した。このうち、リオグランデドスル州の2つの候補地は、町から僻遠だったり、土壌が粘土質や脱塩が必要な塩性地だったりして農業には不適でした。一方、パラナ州のカストロランダは、カストロ市の中心地に近接しており、50km離れた同市内には宗教も同じ先着同胞移民が創設したカランベイ移住地がありました。そのため、移住に向けてさまざまなアドバイスや支援を得られる利点がありました。さらに、パラナ州が移住に際して強力な財政支援を約束したことも、カストロランダを移住地に選定する上で重要な要因になりました。

1950年12月にズヴォレ市で開催された会合では、「移住の基本条件」として次の3点が確認されました。第1は、オランダ政府が移民の資本財持ち出しを許可することで、その総額は154万フローリンでした。第2は、ブラジル政府が5年の支払猶予がある10年ローンで移民に融資を行うことで、その総額は747万クルゼイロでした。そして第3は、パラナ州政府が移住地(5612ha)を405.7万クルゼイロで購入し、それを移民に5年の支払猶予がある10年ローンで分譲することでした。その際、興味深いのは、ブラジルがローン担保の名目で、融資1万フローリンに対してオランダから4~5頭の認定牛の持ち出しを義務づけたことでした。優良な乳牛の獲得は、ブラジルの酪農業の発展にとっても不可欠でした。そして、「ブラジルへの集団移住のための協同組合(C.E.G.B.、Cooperativa para Emigração em Grupo para o Brasil)」が設立されて渡航準備が始まり、1951年5月には移住地の区割り地図が移民に提示されて各世帯の入植場所が決定しました。

移住地の区割り地図には、ロッテ(lote)と呼ばれる各入植地の面積や土地価格と思われる数字が記されています。ロッテの面積は35~200haで、価格はカストロ市の中心地からの距離、土地の等級、面積により異なりました。平均分譲価格は3.7万フローリンで、1万~10万フローリンの価格幅がありました。ロッテは最大3人で共同取得することも、1人で複数のロッテを購入することもできました。同じロッテに複数の入植希望者がいる場合には、くじ引きにより入植者を決定しました。

移住地の区割り地図と現状を比較すると、移住後に道路の付け替えや中心地の位置変更などが実施されたことがわかります。また、第1回移民は中心地の周辺を占拠し、第2回移民以降、徐々にその郊外や南部の低湿地沿いに入植が進んだこともわかります。さらに、入植後に自分のロッテと最終的に移住しなかった人の空いたロッテを交換するなどの変更も行われました。

次に移民の渡航歴を概観します。移民は1951年11月出航の第1回から1954年5月出航の第7回まで実施され、家族と単身渡航者あわせて合計362人が移住しました。また、移民とともにウシ1200頭、トラクター12台、トラック1台、そのほかにジープや工具、機器類、家財道具などが大西洋を渡りました。フランスのマルセイユ港から旅立った第1回移民を除き、移民の出航地はすべてオランダのロッテルダム港で、ブラジルのリオデジャネイロ、サントス、パラナグアまでの渡航日数は約20日間でした。

ウシは移民船でも運ばれましたが、移民の渡航に先立って、別の輸送船でブラジルへ送りだすケースも多く、その際はウシの世話をするために家長や息子など家族の誰かが、ウシに随伴して一足先にブラジルに旅立ちました。ウシは船から降ろされた後、ブラジルでの検疫や環境に馴化させるため、サンパウロのアグア・ブランカ(Água Branca)に運ばれました。そして、そこで数ヶ月を過ごした後、鉄道やトラックでカストロランダに輸送されました。ブラジルに連れて来

られたウシは認定書付きの純血種だけで、その頭数は移民の資本力に応じて異なりますが、平均15~20頭だったそうです。

古い写真をお目にかけましょう。これは1951年にカストロ市で実施された移住地視察の様子です（写真3）。これは1950年頃、オランダのドレンテ州ホーヘフェーン市で開催された「ブラジルへの集団移住のための協同組合」会合での移住希望者たちの集合写真です（写真4）。この写真は、第1回移民のG. レファーズ氏が移住前に住んでいたオランダの住居です（写真5）。大きな家の周りにはクリークに囲まれた農地が広がり、彼らがさらなる農牧業の発展と可能性を求めてブラジル移住を決断したことがうかがえます。

カストロランダ歴史博物館（Museu Histórico de Castrolanda）には、渡航時の写真も保存されています。これは1952年の第2回移民が「アリオト丸」の船上

で撮った集合写真です（写真6）。またこの写真は、サントス港で船から降ろされる乳牛の様子で、その後検疫と環境馴化のためにアグア・ブランカに運ばれました（写真7）。

カストロランダ移住後の写真もご紹介しましょう。これは1954年に撮影されたオランダ人移民



写真3 カストロ市での移住地視察の様子（1951年）  
（出典：カストロランダ歴史博物館所蔵）



写真4 「ブラジルへの集団移住のための協同組合」会合での移住希望者たちの集合写真（1950年頃、オランダドレンテ州ホーヘフェーン市にて撮影）（出典：カストロランダ歴史博物館所蔵）



写真5 第1回移民のG. レファーズ氏が移住前にオランダで住んでいた家  
（出典：カストロランダ歴史博物館所蔵）



写真6 第2回移民が「アリオト丸」の甲板で撮った集合写真（1952年）  
（出典：カストロランダ歴史博物館所蔵）

の若者たちで、庭には2台のバイクが見られます（写真8）。これは1966年に新たに建設された、カストロランダ福音改革派教会（IER）の落成式の様子です（写真9）。この教会は、現在もオランダ人コミュニティの要として機能しています。これは移住直後の1952年に、子弟教育やオランダ語の継承を目的に開設された、カストロランダクリスチャン小学校協会（Associação da Escola Primária Cristã de Castrolanda）の児童と先生の集合写真です（写真10）。

全57世帯のオランダ人移民について、世帯主名、同伴者（妻の有無、子どもの数）、出身地（住所と州名）、職業、渡航集団と移住年月日、入植地（移住地区割り地図のロッテ番号）を調査しました。それによると、家族移住者は47世帯、単身移住者は10世帯です。家族移住者はほとんどが農家で、子どもが多く、中には16人とか10人という家も見られます。これに対して単身移住者は、大工、獣医、肉屋、メイドといった農外部門の職業が目立ちます。出身地で最も多いのはオランダのドレンテ州で、全体の51%にあたる29世帯です。次いで多いのがオーファーアイセル州の14世帯（24%）で、これら2州で全体の75%を占めています。残りはフリースラント州の7世帯（12%）、フローニンゲン州の6世帯（11%）、南ホラント州の1世帯（小学校の教師、2%）と続きます。



写真7 サントス港で船から降ろされてサンパウロのアグア・ブランカに輸送されるウシ（1952年）  
（出典：カストロランダ歴史博物館所蔵）



写真8 移住後に撮影されたオランダ人移民の若者たち（1954年）  
（出典：カストロランダ歴史博物館所蔵）



写真9 カストロランダ福音改革派教会（IER）の落成式（1966年）  
（出典：カストロランダ歴史博物館所蔵）



写真10 カストロランダクリスチャン小学校協会の児童と先生（1955年）  
（出典：カストロランダ歴史博物館所蔵）

また、オランダ人移民全 57 世帯の移住後の動向についても調べました。すなわち、家族全員がカストロランダに居住、家族全員が国内外に再移住、家族の一部が国内外に再移住のいずれなのか、具体的な移住地や移住者数も含めて調査しました。それによると、家族全員が現在もカストロランダに居住しているのは 23 世帯 (40%)、家族の一部が国内外に再移住 (家族の一部はカストロランダに居住) しているのは 19 世帯 (34%) で、両者をあわせると全体の約 4 分の 3 にあたる 42 世帯が現在も移住地に居住しており、オランダ人移民の比較的高い定着率が見てとれます。

一方、家族全員が国内外に再移住したのは全体の約 4 分の 1 にあたる 15 世帯 (26%) で、その 8 割にあたる 12 世帯はすべて子どものいない世帯 (5 世帯は単身渡航者) であり、移住後の流動性が高かったことがわかります。再移住先で最も多いのはオランダへの帰国組で 7 世帯、次いでカナダ 4 世帯、ブラジル内の他のオランダ人移住地 3 世帯、アメリカ 1 世帯です。また、家族の一部が国内外に再移住した世帯の移住先で多いのは、オランダ 29 人、国内のオランダ人移住地 12 人、カナダ 7 人、アメリカ 2 人で、オランダへの帰国者が圧倒的に多いことがわかります。

オランダへの帰国者がいる世帯は、全 57 世帯の 42% にあたる 24 世帯にのぼります。カストロランダに移住して 10 年後の 1960 年代には、すでにオランダの経済も回復して、もはや募集してもブラジルに移住する者はなく、逆に母国に戻る移民が増えたといえます。もちろん、再移住先はオランダだけではなく、1960 年代半ばには豊かなカナダやアメリカに転住する者や、1970 年代以降は手狭になった移住地を出てブラジル南東部に新たな移住先を求める者も現れました。カナダへの再移住者がいる世帯とブラジル国内への再移住者がいる世帯は、ともに各 8 世帯 (14%) を占めています。

カストロランダに定住しているオランダ人移民にとっても、母国との紐帯は重要かつ強固で、私がインタビューした移民の女性も、すでに 6 回ほど旅行でオランダに帰国していると話していました。

### 3. 移民の婚姻関係と言語・民族文化の継承

最初にオランダ人移民の婚姻関係についてお話しします。1952 年 9 月に両親と子ども 10 人でカストロランダに移住した、第 2 回移民のサロモン家の家系図を作成しました。それによると、10 人の子どものうち未婚者と死亡した 2 人を除く 8 人はすべてオランダ人と結婚しており、そのうちの 5 人はカストロランダ移住地内の移民同士の結婚です。また 1 人はオランダに帰国してそこで結婚しています。

一方、孫の世代は合計 23 人 (養子の 3 人を除く) いますが、このうち 15 人は「ブラジル人 (移民やその子孫でない人)」と結婚しており、オランダ人との結婚は 5 人に過ぎません。他にはドイツ系との結婚が 1 人、独身者が 1 人、未亡人が 1 人です。

同様の婚姻関係調査を、第 5 回移民のキルス家でも実施しましたが、やはり 6 人いる子どもの世代は全員がオランダ人と結婚しています。しかし、孫の世代になると、独身者 3 人を除く 13 人中、7 人がオランダ人、5 人が「ブラジル人」、1 人が日系人と結婚していました。

このように、世代が進むにつれて婚姻関係は多様化をみせ、他の民族との結婚も急増することがわかります。インタビューによると、1975 年にドイツ系と結婚する移民女性が初めて現れるま

で、カストロランダではオランダ人同士の結婚しか見られなかったそうですが、それ以降は徐々に他民族との結婚も増えていったそうです。

そこで、オランダ人移民が移住地に建てたカストロランダ福音改革派教会の名簿 (*Guia da Comunidade 2017*) をもとに、260組の夫婦の婚姻関係を調査しました。その際、「～人」とは移民のことで、幼少期に親に連れられてブラジルに移住した子どもも含まれます。一方、「～系」はブラジルで生まれた混血していない移民の子どもたちのことです。

この調査によると、オランダ人の男性は、オランダ人やオランダ系の女性との結婚が全体の8割を占めています。一方、オランダ人の女性は、ほぼ全員がオランダ人の男性と結婚していますが、すでに高齢となり配偶者のいない人も半数近くいます。

一方、彼らの子どもであるオランダ系は、移民に比べてその婚姻関係がより多彩です。オランダ系の男性は、オランダ系の女性に加えて「ブラジル人」やドイツ系、ポーランド系、イタリア系などとの結婚も増えています。この傾向はオランダ系の女性も同様であり、中には日系人との結婚もみられます。

さらに3世以降の多様な混血者同士の結婚は、今はまだ相対的に多くありませんが、その数は今後ますます増加することは自明です。オランダ人の他民族との結婚で相対的に数が多いのは、「ブラジル人」のほかにはドイツ系です。その要因の一つとして、ドイツ系の一部はルター派の信者で、宗派は異なりますが同じプロテスタント教徒であることが挙げられるそうです。

次に移民の母語であるオランダ語の継承についてお話しします。移住地にはカストロランダ福音派学校があり、その隣にはウィレム＝アレクサンダー王子オランダ語学校 (*Escola Holandesa Prins Willem Alexander*) が設置されています。カストロランダ福音派学校の起源は、1952年に開設されたカストロランダクリスチャン小学校協会で、その後校名を何度か変えて1994年に現在の名前になりました。校名が示す通り、ここはカストロランダ福音改革派教会が運営する私立学校で、現在、幼稚園 (3学年) から義務教育である初等教育 (9学年) までに、合計240人が学んでいます (写真11)。このうち、移住地に住むオランダ系の子弟は全体の約3割で、残りはカストロ市内や郊外の農村地帯からマイクロバスで通学しています。その中には日系人も10人ほど含まれています。この学校には教師が38人もおり、オランダ系、イタリア系、ドイツ系、ポーランド系、スペイン系、アラビア系など、その民族的出自はきわめて多彩です。

このカストロランダ福音派学校が運営しているのが、隣に建つウィレム＝アレクサンダー王子オランダ語学校で、オランダ語の学習を通じてオランダの伝統や文化を継承することを目指しています。現在、全学生の6分の1にあたる40人 (17%) がここでオランダ語を学んでいます。この40人のうち、オランダ系は全体の72%にあたる29人で、残りの11人は他民族の子どもたちです。



写真11 カストロランダ福音派学校の児童  
(2019年8月筆者撮影)



カストロオランダ福音派学校全体でみると、オランダ系は全学生の約30%なので、現在、オランダ系の子弟でオランダ語を学んでいるのは約40%に留まることになります。2016年には63人がオランダ語を学んでいましたが、その数は年とともに減少しているようで、オランダ語学校の関係者を悩ませています。

オランダ語学校には教師が3人おり、そのうちの1人はオランダ語の海外普及を推進するオランダ留学財団（NBO、Stichting Nederlands Onderwijs in het Buitenland）というオランダの組織から派遣されています。NBOは世界約220か国に海外学校を展開しており、ブラジルではリオデジャネイロ、カストロオランダ、アラポティの3か所にある学校に教師を派遣しています。教師の給与はカストロオランダ福音派学校が負担し、NBOはオランダ語のテキストや諸々の教材費、作業経費などを、学生1人あたり年間120ユーロ提供しています。つまり、学生数が40人だと総額4800ユーロ（約58万円）の負担になります。

NBOの派遣教師は、週19時間オランダ語の授業を担当しています。そのほかに、週2回朝7時から8時までの1時間、カストロオランダ農産業協同組合の従業員6名にもオランダ語を教えています。彼らの月謝は1人あたり220レアル（約5720円）で、その半額をカストロオランダ農産業協同組合が補填しています。オランダ系でない組合の従業員が、自身の興味とスキルアップのためにオランダ語を学んでいるわけです。ちなみに移住地では、移民（おもに2世）同士は日常的にオランダ語で会話しますが、その子弟（おもに3世）はオランダ語をある程度理解するものあまり話さない人が増えます。そして4世以降はオランダ語を理解せず、ポルトガル語への移行が完了しています。

オランダ語の学習だけでなく、さまざまな年中行事がオランダ文化の継承や移住地の宣伝・結束を目的に実施されています。4月には、オランダ系の人々が集まってダンスやコーラス、仮装などを楽しむオレンジ祭り（Oranjefeest）が開催されます（写真12）。また7月にはパラナ民族フェスティバル（Festival Folclórico de Etnias do Paraná）への参加や、国内6つの中核的オランダ人移住地が競う運動会のヘキサスロン（Zeskamp）、8月上旬には国際的な乳業フェスティバルであるアグロレイテ（Agroleite）、そして11月には住民が5km・10kmコースに分かれて夕方に移住地を歩くウォーキングイベントのアボンドフィールダーグセ（Avondvierdaagse）や、カストロオランダ移住地の誕生祝いである風車祭り（Molenfeest）が開催されています。

このうちヘキサスロンは、6つの中核的なオランダ人移住地の交流と結束の強化を目的に実施される運動会の様なもので、会場は6移住地を巡回しています。

また、1958年にオランダ領事夫人の発案で始まったパラナ民族フェスティバルは、毎年7月に約2週間、クリチバ市のガイラ劇場で開催されるパラナ州の一大イベントです。日本、イタリア、ドイツ、オランダ、



写真12 4月に開催されるオレンジ祭り（2014年）  
（出典：カストロオランダ歴史博物館所蔵）



写真13 オランダの都市を彷彿とさせるアグロレイテ会場入口の建物群 (2018年8月筆者撮影)



写真14 アグロレイテ会場内のウシの見本市 (2018年8月筆者撮影)

スペイン、ウクライナ、ポーランド、ブラジルなどの約15団体が参加して、各国の民族舞踊や歌謡を披露し、競い合います。このフェスティバルに毎年参加する「カストロランダオランダ民族グループ」は、オランダの民族文化を継承する目的で1953年に設立された由緒ある文化団体で、現在はダンス指導など5人のコーディネーターと38人のメンバーが活動しています。メンバーはオランダ系に限らず、「ブラジル人」やドイツ、イタリア、ポーランド、ウクライナ系の人々も参加しており、毎週土曜日の午後のカストロランダ福音派学校のホールで練習を重ねています。

2001年からカストロランダで毎年開催されているアグロレイテは、ブラジルはもとより世界中から乳業部門の企業や関係者が集まる巨大な産業イベントです。8月上旬の5日間開催され、ウシのブリーダー（育種家）、行政機関の関係者、乳業関係者、農業機械会社、種苗会社、農業関係者などが一同に集まり、各分野の最新技術や情報の交換を行います。会場の入口には、オランダのアムステルダムを彷彿とさせる建物が林立し（写真13）、会場内ではウシの見本市などが開かれています（写真14）。血統が明記されたホルスタイン種やジャージー種などの乳牛が展示されています。また、コンバインやトラクターなどの大型農業機械、酪農業の機械、飼料作物の種子なども展示されています。ちなみに、2018年のアグロレイテの来場者数は7万3000人で、ウシ700頭、企業205社、投資家26人が参加しました。

#### 4. 農産業協同組合と酪農業の現状

最後に農産業協同組合と酪農業の現状についてお話しします。パラナ州には3つのオランダ系農産業協同組合があります。このうち、1925年にカランベイに作られたオランダ酪農協同組合（Sociedade Cooperativa Hollandesa de Laticínos）は、ブラジルで最古の農業協同組合であり、それが核となって第二次世界大戦後にカストロランダやアラポティに新たな農業協同組合が設立されました。各農業協同組合は、時代とともにその名称や取扱品目、経営体制などを大きく変化させながら現在に至っています。今ではどの組合もパラナ州の内外に多数の支部をもち、多数の従業員や組合員を抱える企業体（農産業協同組合）に成長しています。

現在のカストロランダ農産業協同組合（Castrolanda Coopetativa Agroindustrial）は、新たな移民を受け入れるために、1951年にカランベイのオランダ人移民7人により設立されたカストロラ

ンダ協同組合 (Cooperativa Castrolanda) がその母体で、現在では酪農、養豚、穀物生産を中心とする巨大なアグリビジネス企業に成長しています (写真15)。カストロランダの本部に加え、パラナ州やサンパウロ州に10の支部をもち、2018年の組合員数は961人、2018年の総売上高は33億8000万リアル (約1000億円) に達しています。



写真15 カストロランダ農産業協同組合の穀物サイロとカストロランダ歴史博物館 (手前)  
(2017年8月筆者撮影)

パラナ州のカランベイ、カストロランダ、アラポティに立地する3つのオランダ系農産業協同組合の組合員分布図をみると、その範囲は東西・南北それぞれ100km以上におよび、オランダ系農産業協同組合の農産物集荷圏がいかに巨大なものかよくわかります。カストロランダ周辺の農家は、そのほとんどがカストロランダ農産業協同組合の組合員であることがわかります。

ブラジルでは近年、農産業協同組合が増加してその力を強めています。世界的な経済誌であるフォーブスのブラジル版 (Forbes Brasil Magazine) は、2019年にブラジルの大手アグリビジネス企業50社を選出しましたが、その中には農産業協同組合が17社も含まれています。そのリストをみて驚くのは、選出された農産業協同組合の6割を超える11社がパラナ州内の農産業協同組合であり、そこにはカストロランダ農産業協同組合、カランベイのフリージア農産業協同組合 (Frísia Cooperativa Agroindustrial)、アラポティのカパル農産業協同組合 (Capal Cooperativa Agroindustrial) の3つのオランダ系農産業協同組合もすべて含まれています。

2019年9月現在、カストロランダ農産業協同組合の組合員数は1181人です。新規加入の組合員数は1970年代後半より徐々に増加し始め、とりわけ2000年代以降は、年による増減はみられるものの、全体としてその数を急激に増やしてきました。とりわけ2018年と2019年は、新規組合加入者が100人を超える急増ぶりを見せています。組合員の年齢構成は、10代から90代まで幅広く、もっとも多いのは50代で平均年齢も50歳です。30代や40代の組合員も多く、後継者が安定して育っていることがうかがえます。組合員の国籍はブラジル人が約9割を占めていますが、オランダ人も43人います。組合員の居住地は、パラナ州が全体の8割で、残りの約2割がサンパウロ州です。組合員の経営形態は、酪農に飼料作物や穀物の栽培を組み合わせた複合経営が中心です。

最後に、第4回移民の後継者が所有するファゼンダ・サントクルス・デ・バイショを事例に、酪農経営の具体例をお話します。ここは2012年10月にラテンアメリカで初めてロボットによる自動搾乳システム (VMS、Voluntary Milking System) を導入した農場としてつとに有名です。

面積240haの農場は、180haの農地、10haの放牧地、50haの道路・建物・森林から構成されています。森林に囲まれた農地では、夏作物でダイズ、トウモロコシ、フェジョンマメ、小麦が合計50ha栽培されるほかは、すべて飼料作物が栽培されています。放牧地は農場中枢施設の周囲にあり、泌乳前のウシを年齢毎に分けて放牧しています。農場中枢部には事務所、泌乳牛を集



写真16 ロボット自動搾乳機（手前）を設置した近代的な畜舎  
（2018年8月筆者撮影）

めた畜舎、堆肥置き場、飼料置き場、放牧前のウシの畜舎（プレパルト）、豚舎、哺乳牛の畜舎、従業員の住居などが配置されています。

飼育されているウシは451頭で、このうち泌乳牛が147頭、仔牛・素牛が185頭、非生産牛が41頭、牡牛（種牡牛を含む）が78頭です。これは泌乳牛の畜舎の写真ですが、手前にロボット自動搾乳機が2台設置されています（写真16）。天上に多数並ぶファンは、気温が22℃を超えると自動的に作動します。ウシは通路を挟んでその両側におしりを向き合わせて配

置されており、餌は畜舎の外に撒くと体をせり出して食べます。畜舎の中には自動で動く回転ブラシがあり、ウシはそれに頭や体をこすりつけて自分で体を掃除します。畜舎の床にはゴムが敷かれており、糞尿は機械が自動的に集めて堆肥置き場に運びます。集められた糞尿は液体と固体に分別され、固体はシートで覆ってバイオガスを生産した後、畑に肥料として散布されます。

搾乳は1日3回で、ウシは時間になるとロボット自動搾乳機の前に並んで順番を待ちます。そして、自らロボットの中に入ると、機械が自動的に乳首を探して殺菌を行い、搾乳を始めます。1頭の搾乳にかかる時間は約7分です。ロボット自動搾乳機は2台あり、1台の搾乳機で1日約70頭を搾ります。自動搾乳機の洗浄は1日2回、真夜中と昼間に15分ずつ行います。1日の搾乳量は1頭あたり平均約38リットルで、農場全体では1日約5300リットルになります。牛乳は9700リットル入りのタンクでカストロランダ農産業協同組合に出荷されます。この自動搾乳システムはスイス製で、ロボット自動搾乳機1台の値段は約50万リアル（約2000万円）、自動搾乳システム全体では合計250万リアル（約1億244万円）の設備投資がかかったそうです。

もちろん、搾乳システムは飼育頭数の増加に伴って変わります。この写真はカーホセル（回転木馬）と呼ばれる回転式搾乳システムで、1回に24頭分の搾乳ができます（写真17）。ウシが自ら順番に回転台に乗ると、従業員の女性は乳首の消毒と搾乳器具の取り付けだけを行います。搾乳時間は1頭あたり6～7分で、回転台が1周する間に終了して器具が自動的に外れ、ウシは回転台から順番に降りて外に出て行きます。ウシの首にはロガーが付いていて、搾乳量などの個別データがすべて自動で記録されます。この農場の泌乳牛は230頭で、搾乳は1日3回、搾乳量は合計8000リットルになります。

さらに、ウシの飼育頭数が900頭と大きなカランベイの大規模酪農場では、雇用者が70～80人もいるそうで、搾乳作業もより人力に頼らざるを得なくなります。この農場では、ウ



写真17 カーホセル（回転木馬）と呼ばれる回転式搾乳システム  
（2019年8月筆者撮影）

シは自ら左右に20頭分ずつ仕切られた枠の中におしりを向き合わせて入ります。すると、真ん中の通路で待機している女性たちが一斉に搾乳器を取り付けます(写真18)。各ウシの搾乳量は自動的に記録され、牛乳はパイプで別室のタンクに集められて冷却貯蔵されます。1回に合計40頭の搾乳ができるこのシステムでは、1日3回の搾乳で合計3万1500リットルの牛乳が生産され、フリージア農産業協同組合に出荷されています。



写真18 1回に40頭を搾乳する大規模酪農家の搾乳システム

(2018年8月筆者撮影、カランベイ)

## 5. まとめ

最後に、カストロランダ移住地のオランダ人移民について、その特徴をまとめます。

1. 1951年にオランダ人移民が創設したカストロランダ移住地は、その後ブラジルを代表する酪農地域となり、現在では乳業部門におけるアグロビジネスの核心地として発展を遂げています。
2. 当移住地で農牧業が顕著に発展した背景には、ブラジル・オランダ両国の移民に厚遇な協定の批准がありました。また、専門家による移住前の入念な現地視察や、移住後の継続的なオランダの技術支援なども、移住地が発展する礎となりました。
3. 1911年に近隣のカランベイに入植した先着同胞移民の多様な支援も、移住地の発展に大きく貢献しました。とりわけ1951年にカランベイのオランダ人移民の尽力により設立されたカストロランダ協同組合は、入植直後から移民たちの経済生活を支えました。
4. 移民たちは、カストロランダや他のオランダ人移住地の人々との親密な交流や婚姻関係を通じて、オランダ語やオランダの民族文化、宗教を保持・継承することで、オランダ人としてのアイデンティティを堅持してきました。
5. 移住後、世代が進むにつれて、「ブラジル人」や他の民族集団との交流や結婚が急増しています。その結果、オランダ系以外の民族によるオランダ語やオランダの民族文化の学習、オランダ系農産業協同組合への参加なども顕在化しており、カストロランダのオランダ人移住地は現在、新たな変化局面を迎えているといえます。

以上で発表を終わります。ご清聴、ありがとうございました。

[本研究はJSPS科研費JP18H00767(代表：丸山浩明)の助成を受けた]

(まるやま ひろあき 本学文学部教授)